

---

# 異世界転移

ルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界転移

### 【ノート】

N0199U

### 【作者名】

ルト

### 【あらすじ】

異世界に飛ばされた私は、得難い友人を得て、共にこの世界で生きていく。

この世界の人は、悲しいと、私は思う。

異世界に飛ばされた私が言うのもなんだけど、私の世界よりも、たくさんの人が死に、たくさんのお血が流れ、たくさんの人が同じはずの人間が持つ欲望と傲慢に振り回されて、生きている。

「そうやって憐れむのは傲慢よ。少なくともあなたよりも笑っている人は、たくさんいるわ」

「知らないよ、そんなの」

夕日に焼かれた空が町を茜色に支配している。

入り口がやや登りづらい小高い丘にある公園は、お昼過ぎにたまにいる子供連れを除けば、たいていいつも誰もいない。

人工的に植えられた木が住宅街のオアシスとして憩いを強要し、錆び付いたバネにまたがるウサギは、ペンキの剥げかけた瞳で、妄執のように見つめてくる。風以外に乗るものがないブランコは、鎖が錆びて固まってしまったかのように動かない。

腐りかけた丸太の柵は展望台を気取って観覧者を庇うが、たかが住宅街に見るべきものがあるはずもなく、その勇姿を風と雑草に笑われている。

巨大な彫刻の彫り込みにも見える、街並みに走る道路をセーラー服を来た女子が三人、じゃれ合って歩いていた。

「あなたのクラスメイトじゃない？」

「知らない。学校なんて一回も行ったことないし」

答えた言葉に、胸がきしりと痛む。

違う。私は学校なんて関係ないし、会ったこともないクラスメイ

トに話すことなんか何も無い！

「そう、そうよね。私だって、一回もないわ。中学校は皆勤賞だったけど」

意味が分からないわよね、と彼女はクスクス笑った。

私は黙る。この世界の、嘘の記録を口に上らせるなんて、耐えきれない。

彼女は私の沈黙を気にした様子もなく、静かに言葉をついだ。

「最近、やっぱり、あなたとこうしてるのが夢みたいに思えてくるわ」

体を跳ねるように起こして隣を振り向く。

風になびく髪を押さえていた彼女が驚いたように目を丸くして私を見ていた。

「違う！　こうしてるのが現実なの！　この世界のことなんかまやかしかだ！」

優しくしてくれたような気がする母親も、心配してくれている気がする父親も、私は一度しか見たことがない。会話なんて全くしてない。いつものように家を出て、それっきりだ。

頭を抱える。髪を鷲掴みにし、胸に去来する寂しさも申し訳なさも、こんなの、ひとつも、私のものなんかじゃない！

「だから、だから絶対に違う！」

すべて振り払うように、私は吐き捨てた。

彼女は戸惑うように手をさ迷わせながら、困り果てたような笑み

を張り付ける。

「ごめん、ごめんなさい。そうよね、変なことを言っでごめんね」  
「その顔やめて」

「えっ？」

「こんなとき、普通笑ったりしない。私の世界では」

「そうよね、ごめんなさい」

彼女は人差し指を曲げて鼻頭に添えた。懐かしい所作に胸が詰まる。

私の世界の仕草だ。

本当の父と母を思い出す。友達も、馴染みの店も、汚い石の壁も土埃の臭いも次々と脳裏に蘇る。

「どうして、こんな世界に来ちゃったんだろう」

「分からないわ」

分からない。誰も知るはずがない。

故郷を強く思うほど、この世界が意識に昇る。少しずつ世界が私の心を侵食する。

もう故郷の名前も思い出せない。違う、違う！ 川越は私の故郷じゃない！

「今日は、もう帰るわね」

「えっ？」

「もう、暗くなってきたから。それじゃ、また明日」

真美は軽く手を振って、違う、彼女の名前は真美じゃない！

私は慌てて彼女に手を振り返した。淡く微笑んで、彼女は公園から去っていく。

気を、使わせてしまった。

彼女は故郷の世界を同じくする、同世代の友人だ。このような出会いは天のもたらしたものと言う他なく、私たちは時間を見つけては寄り添い世界のことを語り合った。

でも、郷愁が強くなるほど、その思いがこの世界のことにはすげ替えられて、私はこの世界のものに染められていく。

だからこそ、彼女は私が影響を強く受けていることに気づいて、私から離れたのだ。

ただ、それが必ずしも正しいかは分からない。

一人にされて感じる虚しさや心細さは、寂しくて寂しくて、私の心を蝕んでいく。

だから、そう。

温かく優しい家庭に帰るわけには絶対にかない。

私が生まれ育った世界の記憶を、子供の頃から住んでいた川越の景色で上書きしてはならない。

帰りたい。

寂しい。

連絡していない愛花や理穂は心配しているだろう。

お母さんとお父さんは、謝ったら家出していたことを許してくれるだろうか。

家に帰りたい。

「ぎゅっ！」

目を見開いて飛び上がった。

青ざめた空にぼつぼつと街灯が浮かび、キイと錆びた音を立ててブランコが揺れた。

頭を抱え、きつく閉じた目の端から涙が溢れる。足に力を入れる気力がなくなり、地べたに崩れ落ちる。

ずっと耐えてきた。

私の故郷とは違う異世界からやって来た人が、愛する故郷を夢と笑い、幻想に隠し、日常に消してしまう姿を何度も見てきた。

語ってくれた故郷の話を、まるで聞き慣れない逸話のように面白そうに聞き、あるいは不気味そうに避けるのを見てきた。

昨日出会った十年來の友人を心配し、会ったこともない家族を思い、先週まで存在しなかった慣習を守り、先月まで存在していた技術を発明するところを、何度も、何度も。

この世界は歪み、狂い、それでも笑っている、悲しい世界だ。

だから、お願い、私に優しい温かさを与えないで。

お願いだから、私に居場所を与えないで。

お願いします、私から、全てを奪われた悲しみまで、奪わないで。全てを与えて、私を殺すのは、やめて。

お願い、お願いします。

私を笑顔にさせないで。

「……千夏」

「あ、真美」

いつの間にか眠ってしまったらしい。空は厚く黒色を重ねたように暗い。深夜になっているようだ。

「いつまでも帰ってこないから心配したわよ。大丈夫？」

真美の言っていることが少し分からなくて、  
真美の家に住み込んでいたんだっただ。 ああ、そうか。

私は、澄田千夏は、現在川越の生家から絶賛家出中なのである。

「もう、意地張るのやめて帰ったら？ おばさんから相談の電話を毎日受けて、困ってるんだから」

「そうなの？ うん、そっか。そうだね、そろそろ、帰ろうかな。帰りたくなってきた」

それに、いくら幼馴染みといっても、真美に迷惑かけすぎだからね。

愛花も理穂も、黙って出ちゃったから、すごく怒っているかもしれない。特に愛花にはぶん殴られそうだし。

黙って私を見ていた真美がクスクスと笑った。

「ほら、やっぱり意地張らない方がいいのよ」

「え？」

「だって、千夏、笑ってる」

反射的に頬に指を添える。

私は笑っていただろうか。

「私、そんな笑ってた？」

「うん、嬉しそうに」

「そうかな？」

「そう。さ、帰りましょう」

真美に促されて、私は歩き出す。

世界を、笑顔で。

(後書き)

通例の逆バージョンと、その事実が露呈しない現実と、ある種の「人でない存在」の介在を許す世界観と、ついでに歴史的パラドックスを紐解く、多世界解釈や可能世界並行世界の存在が大っ嫌いな私の考察。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0199u/>

---

異世界転移

2011年8月21日15時17分発行